



洋服100年の歴史を背景にその歴史とともに歩み続けた洋服店の話を書こうと思いついたとき、私の頭にはすぐ柴田音吉洋服店の名が浮かんだ。

近代洋服発祥の地とされる神戸で、業界の先駆者と呼ばれる初代柴田音吉、あとを受けて羅紗業界に手を広げる一方組合活動のリーダーとして業績を残した2代目音吉。

第二次大戦後、押しも押されぬ業界の雄としての柴田商事株式会社を築き上げ、その一方超一流店としての洋服店経営をも安定路線にのせた3代目柴田高明社長……。

こう書いてくるとあまりに順風満帆、面白くもオカしくもない成功談である。

それなのに取材しているうち興味が深まっていったのは、やはり登場人物、がユニークで魅力的だったからだ。

初代の天衣無縫さ、2代目の強烈な個性、現社長、専務の静かな知性、その周囲にある人びとのそれぞれの人柄のおもしろさ、それらの人物像の織りなす100年、3代記、をこの24回の連載で書きつくしたとはとてもいえない。

とはいえその登場人物、のおかげで、連載は好評裡に終止したことを有難く思っている。この7か月間、地元神戸を中心に東から南から反響が寄せられた。面白い、と行って下さったこれらの読者に感謝したい。同時にともすればこの種のものに寄せられる「記事広告ではないか」の声が全く聞こえなかったことがうれしかった。「遙かなる風雪」は失なわれがちな古い資料をとどめようとする業界紙の使命感から出発した記録であり、その意味で柴田商事ならびに柴田音吉洋服店に資料と記憶を提供して頂いたわけである。

連載中柴田社長、専務からは何度も「ひかえめをお願いしますよ」と懇望された。

そんな両人の謙虚な人柄を十分反映し得たかどうかは心配だが、記事広告ではないことを業界全体に信じてもらえたことで半ばその意は達せられたと思う。

あとで、いくつかの間違ひもわかった。

そのひとつ、初代音吉が最初に修業した店はスキップ商会ではないかという説をとったが、これは誤りで実はカベル商会であった。

明治初年、横浜在住の洋服

洋服商を営んだ。ほぼ同時期に来神した英国人経営の店ということでこの両者はしばしば間違われるようだ。ここに訂正しておく。

また柴田の店が大正13年に国産毛織物卸業も併営(⑩回)というのは後に記したように昭和5~6年の誤り。

大正13年ごろはまだ扱い商品は輸入服地のみであった。

業界の流れについては、端折った点が多い。

明治年間各地で洋服組合が発祥したこと、あるいは第一次大戦前後の経済状況と、それにとまなう業界の浮沈、大正から昭和へかけての羅紗業界とテーラー間のまさつ、などなど書けばキリがなかった。

また、洋服スタイルの変遷についても、本来なら図解したかったところだが、紙面の都合で割愛せざるを得なかった。そのように不備な点、書き足りない点はあったにしろ近代100年の中で堂々と続いてきた洋服商、のひとつの典型としての片りんは読みとって頂けたと思う。

そこに満ちあふれているのは気概であり、洞察であり、信念であり、また清廉さでもある。それらはどんな時代にもあてはまる成功の条件、でもあり得よう。

ここに一応完結とさせて頂きたい。読者ならびに取材に力を貸して頂いた柴田商事とその関係方面に厚くお礼を申し上げます。

岡 和子

「遙かなる風雪」(実録・柴田音吉洋服店)

## 連載を終えて――

商カベル(英国人)が元居留地16番館に支店を設け、次いで其昌号(中国人)スキップ(英国人)が前後して神戸に